

特別展「錦絵が語る美濃と飛騨」

出品作品について

守屋 靖 裕

当館は平成十八年（二〇〇六）九月十五日から十月二十九日にかけて飛騨美濃合併一三〇周年特別展「錦絵が語る美濃と飛騨」を開催した。このときに展覧会図録（岐阜県博物館学芸部人文担当 編「錦絵が語る美濃と飛騨」岐阜県博物館、二〇〇六年九月）を発行したが、諸般の事情により、一部の出品作品については解説や図版を掲載していない。

そこで、本稿では、図録に解説を掲載できなかった出品作品を取り上げて、解説文を載せて図版とともに紹介する。つまり、本稿は図録の補遺である。図録と併せて参照されたい。本稿の記述体裁も展覧会図録の凡例に原則として則っている。本稿を記すに当たって参照した文献も、展覧会図録に挙げた「主要参考文献」に同じである。ただし図版は解説の後にまとめて掲載している。

第一部 岐阜ゆかりの戦国武将

○織田信長

3 歌川国芳 大多春永の城堀修復 嘉永二年（一八四九） 山本屋平吉
岐阜県博物館

『絵本太閤記』には清洲城割普請の話が載せられる。織田信長（本図では大多春永）の居城、清洲城では石垣の修理が遅れていた。中村藤吉郎（後の豊臣秀吉。本図では中浦猿吉郎）は三日で完成させると信長に約束。石垣一坪

当たりの修理に必要な職人の人数を計算し、職人たちに酒肴を与えて、信長への忠節を説く。次の日から職人たちは作業に励み、三日目に完成した。

本図はその様子を信長に披露する場面。図様は『絵本太閤記』の挿絵に基づく。右上には説明文を添えている。

11 豊原国周 大日本三名将鑑 大判錦絵三枚続 明治十五年（一八八二）
荒井喜三郎 岐阜県博物館

右に織田信長を演じる四代目中村芝翫を描く。国周「地名十二ヶ月之内六月」（出品番号10）と配役・役者とも共通する。左に豊臣秀吉を演じる五代目尾上菊五郎、中央に徳川家康（徳川家康）を演じる九代目市川団十郎を配置する。歌舞伎の中で三人の武将を一セットとして認識していたことを語る作品。

12 松亭金水 著、二代柳川重信 画 日本百将伝一話 巻之十二 半紙本
安政四年（一八五八） 河内屋茂兵衛 岐阜県博物館

「一話」とは簡単な話の意味。本書は道臣命（神武天皇東征のときに活躍）から豊臣秀吉まで百人に関する逸話を絵入りで紹介する墨摺本。嘉永七年（一八五四）正月の自序があり、この頃の刊行と見られる。本書の挿絵は浮世絵師、二代重信が描いている。

「斎藤道三」の項に載せられる挿絵には、織田信長が道三を訪問した際、奇異な格好で美濃に入った話を描く。信長が粗雑な身なりでやって来たのを道三は見た。しかし、実際の対面では信長は正装で現れた。このエピソードを描く。

「織田信長」の項に載せられた挿絵では本能寺の変を描く。明智光秀が寺に迫り、これを織田信長や森蘭丸・坊丸らが迎え撃つ場面を描写する。

○森蘭丸とその一族

18 歌川国芳 **太平記英雄伝** **保里蘭丸永保** 大判錦絵 嘉永元年（一八四

八）～二年（一八四九） 山本屋平吉 岐阜県博物館

保里蘭丸永保は森蘭丸のこと。蘭丸の実名は成利とされるが、長定とする説や長康とする文献もある。本図は、饗応の役を務めた明智光秀に対して織田信長が怒り（国芳「太平記英雄伝 大多上総介平春永公」（出品番号7））、蘭丸に命じて鉄扇で光秀の顔を打たせた場面を描く。蘭丸の傍らに落ちる烏帽子と扇子は光秀のものである。

○明智光秀とその家臣

27 柳斎重春 **三代目中村歌右衛門の武智光秀と二代目嵐璃寛の真柴久吉**

大判錦絵二枚続 文政十二年（一八二九） 天満屋喜兵衛 岐阜県博物館

上方絵とは上方で刊行された浮世絵版画を指す言葉で、江戸版画に対する呼称である。本図はその上方絵の一つである。文政十二年九月の、大坂角の芝居「松下嘉平治連歌評判」に取材した作品。中村歌右衛門が演じる武智光秀（＝明智光秀）と、嵐璃寛が演じる真柴久吉（＝豊臣秀吉）を描く。

○豊臣秀吉とその与力・家臣

39 三代歌川豊国（国貞） **木曾六十九駅 細久手 日吉の里 此下藤吉**

大判錦絵 嘉永五年（一八五二）十二月 山崎屋清七 個人蔵
細久手宿近くの日吉の里から、幼名を日吉丸といった豊臣秀吉（歌舞伎では此下藤吉）を描く。役者は四代目坂東彦三郎。

43 **土人形（土雛） 焼香太閤** 塑造彩色 昭和初期、二十世紀前半～半ば

岐阜県博物館

土人形は、庶民が子供の無事な成長を願い、旧暦三月三日に節句人形として飾ったもの。岐阜県内では昭和中期頃まで各地で飾られていた。

本作品は大徳寺焼香で、羽柴秀吉が三法師を肩に抱いて現れた場面を造形化。図像は大徳寺焼香を描いた浮世絵と共通し、月岡芳年「魁題百撰相 羽柴太閤豊臣秀吉公」（出品番号41・42）でも同じ形姿を採用している。武者絵と土雛との間で図像の共有があった可能性も考えられよう。

44 落合芳幾 **太平記英雄伝 竹中半兵衛重治** 中判錦絵 慶応三年（一八

六七）正月 広岡屋幸助 岐阜県博物館

本図は竹中半兵衛重治を描き、略伝を添える。

重治は斎藤竜興の家臣だったが、わずか十数人で稲葉山城を奪取。織田信長に城の譲渡を求められたが、固辞。竜興に城を返し、浅井長政に仕えた。信長の美濃平定後、信長に仕え、やがて秀吉の与力となった。名軍師として知られる人物である。

47 歌川芳虎 **太平記英雄鑑** 大判錦絵三枚続 慶応二年（一八六六）四月

金鱗堂 岐阜県博物館

「太閤記」（本図では太平記）の登場人物を豊臣秀吉（本図では真柴大領久吉）を中心に配置。他に岐阜県に関係する武将では、織田信長（本図右奥の大多上総介春永）・森蘭丸（信長左隣の保里蘭丸永安）・明智秀満（本図左下の武智左馬介道俊）・堀尾吉晴（秀吉の右下の織尾茂助吉春）を描いている。

第二部 美濃・飛騨出身の相撲取り

49 三代歌川豊国（国貞） **大角力両国橋渡図** 大判錦絵三枚続 安政三年

（一八五四） 大黒屋平吉 岐阜県博物館

「おおずもうりようくばしをわたる」と読む。江戸の隅田川に架かる両国橋を渡る、当時人氣のあつた相撲取りたちを描く。どの力士かは不詳だが、白真弓も描かれている。なお、ここに描かれる鏡岩は越後出身で、美濃出身の鏡岩とは別人。

50 二代歌川国貞 荒馬と虹ヶ嶽の取組 大判錦絵三枚続 万延元年（一八

六〇）二月 大黒屋平吉 岐阜県博物館

本図において、飛驒出身の燧洋（白真弓は一時期こう名乗っていた）の名が西の方に、美濃出身の鬼面山の名が東の方に表示されている。なお、本図に描かれている力士、荒馬と虹ヶ嶽は岐阜県とは無関係。

56 歌川芳員 江戸大相撲西之方力士鏡 墨摺絵 江戸時代末、十九世紀半

ば 版元未詳 岐阜県博物館

本図は墨摺絵。十六人の力士それぞれに枠を作って描き出す。各人に説明文が付いている。右上隅の鏡岩浜之助は越後出身で、美濃出身の鏡岩浜之助とは別人。左下隅には飛驒出身の白真弓肥太右衛門を描く。説明文は、三代歌川豊国（国貞）「白真弓肥太右衛門」（出品番号51）よりも簡潔な内容。

58 落合芳幾 大日本大相撲勇力関取鏡 大判錦絵三枚続 万延元年（一八

六〇）六月 小林鉄次郎 岐阜県博物館

日本における古今の著名な相撲取りの名前を列挙し、それぞれの姿を描く。鬼面山は谷五郎（美濃出身）と与一右衛門の名が名簿に挙げられている。しかし、鬼面山と記された相撲取りは図中に一人しか描かれず、どちらの鬼面山を描いたものかは不明。なお、図中の鬼面山は中央の奥の方に描かれ、腕組みをしている。ちなみに本図の鏡岩浜之助は越後出身で、美濃出身の鏡岩浜之助ではない。

59 二代歌川国輝 勳進大相撲繁栄之図 大判錦絵三枚続 慶応二年（一八

六六）三月 大黒屋平吉 岐阜県博物館

本図は画面をコマ割りして、場所入り、引き分け、東西呼び出しなど、相撲における様々な場面を描く。仕度部屋や行司部屋などの楽屋裏風景を描いたコマもある。外題のあるコマの右下に鬼面山と不知火の取組表が見えてい

67 落合芳幾 文久元辛酉年春勳進大相撲土俵入之図 大倍判錦絵 文久元

年（一八六二） 西村屋与八 岐阜県博物館

文久元年春場所の土俵入りを描く。土俵入りとは、力士が観客の前に勢揃いして顔見せをすること。力士は化粧廻しを着け、行司の先導によって土俵に上がる。西の方の最上段に燧洋（白真弓）、東の方の最上段に鬼面山の名前が見える。具体的にどの力士とは確定できないが、最上段の二列に並ぶ力士の中に、二人は交じっている。

本図の上部の改印は安政六年（一八五九）十一月を示す。また、外枠の上辺「境川」の上や、右辺中央のやや上辺りから画中にかけて、版木の継ぎ目が見える。古い版木を再利用して本図を制作した可能性が考えられる。

68 歌川国明 大角力稽古図 大判錦絵三枚続 慶応二年（一八六六）三月

若狭屋与一 岐阜県博物館

「おおずもうけいこず」と読む。外題のとおり相撲取りたちの稽古を描く。後方に控える力士の中で、左から六人目が白真弓である。顔を横に傾け、右の袂に左手を入れる姿で表される。その背後には人物が見える。鬼面山は左から三人目で、うちわで涼む様子で描かれる。

第三部 美濃と飛騨の産業・物産

○飛騨の匠

70 六樹園飯盛りくじゅえんひんせう（石川雅望まさを） 作、葛飾北斎 画 飛騨匠物語 巻之一 半紙

本 明治時代（一八六八～一九二二） 伊丹屋善兵衛 岐阜県図書館

初板本は文化六年（一八〇九）正月に角丸屋甚助を版元として刊行。当資料は後摺本である。外題に「新板」と冠されている。

本書は飛騨国に住む猪名部墨繩いのべのすみなわと檜前松光ひのくまのまつみつにまつわる伝奇小説で、『今昔物語集』や『更級日記』などからヒントを得て、左甚五郎の巷説なども交えて

編まれた読本である。六樹園の序文には北斎の勧めで筆を執ったとある。墨繩の妙術で内容が展開する。

本書には歌川国芳「江都錦今様国尽 飛騨 飛騨の内匠 信濃 八重垣姫」（出品番号69）の元となった挿絵がある。この鶴像は物語の中で、像に括り付けられた悪人を遠くに運び去ることになる。

○和傘

72 和傘 平成時代、二十世紀 岐阜県博物館

本展図録では本資料を昭和時代の作としているが、その後、平成時代の作であることがわかり、ここに訂正する。

加納（現岐阜市）の傘生産は江戸末期に盛んとなった。材料の竹や紙に恵まれたこともあったが、藩の貧しい下級武士の内職として傘作りが行われたという背景がある。明治十年（一八七七）頃になると、従来の番傘を主としていたのに加えて、輸出用の絵日傘も生産するようになった。昭和十五年（一九四〇）頃は和傘生産量が全国一位であった。

○美濃紙

75 美濃紙 昭和、平成時代、二十世紀 岐阜県博物館

本品は現代の美濃紙。三代歌川豊国（国貞）「木曾六十九駅 太田 名産美濃紙 紙屋治兵衛」（出品番号73・74）にも取り上げられたように、美濃紙は美濃の名産品として江戸時代に認識されていた。耐久性に優れていた。

○鵜飼

82 濃州長良川鵜飼図 大倍判錦絵 江戸時代末、十九世紀前半、半紙 文淵堂 岐阜県博物館

岐阜宇津保屋町の文淵堂から出された、岐阜での出版による岐阜の風物を描いた作品。鵜舟と観覧客が乗る屋形舟とが描かれている。文明五年（一四七三）に長良川の鵜飼を見た一条兼良が詠んだ和歌「取あへぬ夜川の鮎のかゝりやきめつらとも見つ哀ともみつ」（『ふじ河の記』所載）が記されている。

84 張月戴 鵜図 絹本淡彩 嘉永四年（一八五二） 個人蔵

錦絵が盛んに描かれた時代と同じ時期に、絹に描いた淡彩画。鵜の絵。月戴は、名古屋で活躍した画家、張月樵の長男。写生を重視し、儒学や書などにも通じていたという。

85 三浦千春 著、池田崇広 画 美濃奇観 上巻 半紙本 明治十三年（一八八〇）一月 三浦饒三郎 岐阜県博物館

本書は上下巻からなる冊子。著者の三浦千春、出版人の三浦饒三郎、発行人の三浦源助とも岐阜県の人。彫は名古屋の豊原堂。古くから美濃の観光名所として有名な長良川の鵜飼や養老の滝周辺を文と絵で紹介する。

上巻の鵜飼についての説明は詳しく、鵜匠や手縄たなわ、鵜飼に使う鵜などを色摺の図で描いている。

86 福田旭水 金華山焼 鵜飼図盃 明治時代、十九世紀末、二十世紀初期

岐阜県博物館

鵜飼は錦絵のモチーフとして比較的よく採用された。それに対して本作品は、やきものに鵜飼が描かれた近代の作例。旭水は明治二十九年（一八九六）金華山焼の窯を築いた。大正時代には岐阜の特産品として栄え、この盃のように、鵜飼を題材とした作品も多く作られた。

第四部 中山道 美濃十六宿十馬籠

○街道

93 月岡芳年 東海道名所図会（部分） 大判錦絵三枚続 慶応元年（一八

六五）五月 大黒屋金之助 岐阜県博物館

歌川芳虎「東海道名所図会」（元治元年〔一八六四〕十一月）は十二枚続の錦絵で、行列が日本橋を出発し、東海道を通って京に至る図である。この十二枚続の終わり（左）から四枚（宮宿、京）と入れ替って、芳年の本図は芳虎の図に接続する仕立てになっている。芳年の本図は名古屋から美濃を経由して大坂城に至る部分を描き、芳虎の画の鳴海宿に接続するように作られている。芳年の本図を継ぐことで、東海道を進んできた行列が尾張から美濃を通り過ぎて大坂城を目指すという作品に変化するのである。

大名行列は徳川家茂の上洛に取材したもの。この上洛は当時の人々の注目を集め、浮世絵の格好の題材となり、多くの作品が生まれた。芳虎の画は文久三年（一八六三）二月十三日出発の上洛を描く。東海道を二十二日かけて三月四日京都の二条城に到着した。一方、芳年の本図は慶応元年五月十六日出発の上洛に基づく。東海道・美濃路・中山道を通り、京に入って参内した後、閏五月二十三日大坂城に入った。

95 新板木曾海道廻双六 間倍判合羽摺 享保（一七一六、一七三六）、天保

（一八三〇、一八四四）頃 美濃屋平兵衛 岐阜県博物館

京都の美濃屋平兵衛から出版。京都らしく合羽摺となっている。「三条大し」から始まり「日光山御宮」で上がりとなっているのは、日光例幣使の行列を意識したものである。日光例幣使は京都の朝廷から毎年派遣された。

○英泉・広重描く木曾海道六拾九次之内

112 歌川広重 木曾海道六拾九次之内 加納 横大判錦絵 天保十年（一八

三九）頃 版元未詳 岐阜県博物館

加納宿は加納城の城下町。画面右奥に見えるのが加納城。前景を大名行列が整然と列をなして進む。出くわした人は道ばたに控えて通り過ぎるのを待つ。本図は後摺。

○国芳描く木曾街道六十九次

129 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 落合 久米仙人 晒女 大判錦絵

嘉永五年（一八五二）六月 林屋庄五郎 岐阜県博物館

『今昔物語集』などに収められる久米仙人の逸話を描く。飛行能力を得て空を飛んでいたところ、吉野川の岸で洗濯している女性の足を見て欲情し、神通力を失って墜落。仙人はこの女性を妻として俗世で暮らすことになった。新しく都を造る際、再び神通力を得て材木を空に飛ばし、これによって都を造営することができた。その功績で土地を与えられ、そこに寺を建てた。これが久米寺（現奈良県橿原市）である。

女性の足に惑わされて落ちる久米仙人は、勝川春潮「久米仙人」を最古として浮世絵に多く取り上げられた。久米仙人は中国の道士風の衣装、女性は江戸の当世風俗で描かれることが多く、本図もこの伝統を守る。「落ちて会う」から「落合」か。

132 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 大井^{おほい} 斧定九郎 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）五月 加賀屋安兵衛 岐阜県博物館

「仮名手本忠臣蔵」から。場面は都外れの山崎街道。娘を祇園に売った金を懐に入れた百姓与市兵衛の背後から、塩冶家（浅野家の戯曲上の設定）の浪人、斧定九郎が「おおい、おおい、親父殿」と呼びかける（ゆえに「大井」）。足を止めた老人を殺して金を奪うが、直後猪に間違われ、早野勘平に討たれる。

明和三年（一七六六）、初代中村仲蔵はそれまでの演出を改め、黒羽二重の衣装に、破れ傘を持ち、手も顔も真っ白に塗った姿で定九郎を演じた。これが大評判を取った。以後、定九郎は若手花形役者が演じる重要な役となっていた。本図はこの演出どおりの姿を描く。

133 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 大久手^{おほくて} 一ツ家老婆 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）七月 八幡屋作次郎 岐阜県博物館

江戸の浅茅が原の中になった一つの家があり、老婆と娘が住んでいた。老婆は旅人を石の枕に寝かせ、上から吊るした石の綱を切って、寝入った旅人を殺し、金品を奪っていた。あるとき、観音を崇拝している稚児が泊まることとなった。稚児に恋心を覚えた娘は身代わりとして石の枕に眠り、老婆に殺されてしまう。老婆はこれを嘆き悔やみ、姥ヶ池に身投げをして自殺。実はこの稚児は浅草観音の化身だったという話。本図では綱を切ろうとする老婆を娘が止める場面を描く。背後には千手観音の姿が浮かんでいる。

後に国芳は一ツ家の老婆の肉筆画を浅草寺に納めて大評判を取ったという。また、弟子の芳年は同じ画題で「月百姿 孤家月」を描いた。千手観音は手が多いので、「大久手」。しかし、実際は浅草観音は聖観音。

140 土人形（土雛） 常盤御前 塑造彩色 昭和十年（一九三五）代 岐阜県博物館

激しい雪の中、牛若を懐に抱き、寒がる今若・乙若を連れて歩く図様は、浮世絵ではほぼ定型化。本作品は出品番号138・139の錦絵と比べると、手に息を当てる乙若、懐に抱かれた牛若など、共通する点がある。錦絵と土人形とが図像を共有していたことを考えさせる。

153 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 垂井^{たも} 猿之助 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）七月 八幡屋作次郎 岐阜県博物館

本図は『絵本太閤記』を出典とする。豊臣秀吉は幼い頃、寺に預けられたり、商家に奉公に出されたりしたが、気性の激しさのため、どれも長続きしなかった。三歳の子供のお守りを任された秀吉は、ある日出奔を決意。井戸に子供をくくりつけて去る。まさにこの場面を本図は描く。樽でできた井戸から「垂井」。コマ絵と外題の縁は千成瓢箪。

国芳は「英名三十六合戦 鬼若丸」でも本図と同じ場面を描く。

154 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 関ヶ原^{せきがはら} 放駒蝶吉 濡髪蝶五郎 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）九月 井筒屋庄吉 岐阜県博物館

二人の相撲取り、放駒^{はなれこま}長吉と濡髪^{ぬれがみ}長五郎を主人公とした浄瑠璃「双蝶蝶曲輪日記」に取材。「双蝶蝶」とあるのは二人それぞれの名前にある「長」と「蝶」を掛けたもの。本図でも彼らの名の「長」を「蝶」に変えている。初演は寛延二年（一七四九）。

本図ではその四段目「大宝寺町搦米屋」の場面を描く。長吉は大宝寺町の搦米屋の息子。ある日長五郎が先日相撲の勝負について恨み言を言いに来る。喧嘩になった二人だが、結局和解し、義兄弟の契りを結ぶことになる。本図で梯子を振り上げているのが長五郎で、それを迎え撃つのが長吉と考えられる。背景には野次馬と思しき人影が描かれる。

この演目には文化二年（一八〇五）に起きた相撲取りと火消しの喧嘩を取

り込んでいるものと指摘して、本図もこれを意識して描いたという説が出されている。

155 歌川国芳 **木曾街道六十九次之内** **今須**^{います} **曾我兄弟** 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）六月 辻岡屋文助 岐阜県博物館

156 歌川国芳 **木曾街道六十九次之内** **今須**^{います} **曾我兄弟** 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）六月 辻岡屋文助 岐阜県博物館

『曾我物語』に代表される曾我兄弟の物語に取材。兄は曾我十郎祐成、弟は五郎時致。本図では曾我兄弟が父の仇、工藤祐経の館に入り、その所在を確かめる場面を描く。五郎が十郎に「います」と合図を送るところから「今須」。外題の縁は十郎の千鳥と五郎の蝶を交互に描く。

第五部 北斎・広重も描いた濃飛の名所・風景

○養老の滝

163 三代歌川広重 **小学教育大日本名所図会** **養老瀧** 横中判錦絵 明治九年（一八七六）頃 児玉又七 岐阜県博物館

養老の滝を描いた作品で、説明文を添える。滝のある風景だけを描いて終わらず、観光客らしき人物も描き添える。なお、本図とまったく同じ絵柄で、かつ同じ作者の手になる「日本地誌略図 養老瀧」という錦絵も存在する。この作品と本図との因果関係が注目される。

165 松浦守美 **本朝廿四孝** **美濃国養老** 小判合羽摺 江戸時代末～明治時代前期、十九世紀後半 星棲堂 岐阜県博物館

本図は錦絵ではなく、合羽摺で制作した富山売薬版画。売薬版画とは、売薬商人が進物（おまけ）として得意先に配った、代表的な品物。富山の職人

が富山で刷っていた。

本図は養老孝子伝説に取材。なりひさごを腰につけて酒を父に買っていた男が、薪を取りに山に入ったときに酒の湧いているのを発見した。霊亀三年（七二七）、天皇が行幸してこの泉に行き、感じ入って養老の滝と名付け、年号を養老と改めた、という。画面に大きく描かれる男は薪を背負い、なりひさごを腰に持っている。左には養老の滝が見える。右上には天皇の一団が描かれている。

166 **引札** **酒店** 明治時代（一八六八～一九二二） 岐阜県博物館

引札とは江戸時代以後に商店が開店や商品売り出しを宣伝するために配った札。現在のチラシにあたる。本資料は石版画。新潟の酒屋の広告。酒を扱うことから、養老孝子伝説をモチーフとして採用したと考えられる。

167 葛飾北斎 **今様柳箴雛形** 横本（美濃本二ツ切） 文政六年（一八二三）五月刊行 角丸屋甚助・西村屋与八 岐阜県博物館

「いまようせつきんひながた」と読む。柳とキセルの図案集。養老孝子伝説に基づくものも掲載。このモチーフがキセルに採用されていたことがわかる。この冊子は柳やキセルの職人だけでなく、ほかの分野の工芸職人も使った。そのため、保存状態のよい現存本は少ない。

168 **養老名勝絵葉書** **養老の瀧** 大正後期～昭和初期、一九一〇～三〇年代 筒井盛華堂 岐阜県博物館

「ようろうめいしょうえはかき」と読む。写真を使っているので、当時の実際の風景を示す。小林清親「日本名勝図会 養老瀑布」（出品番号164）と構図がよく似るが、清親がこの地を訪れた記録は見られない。

○阿弥陀ヶ滝

171 郡上八幡工ハガキ 阿弥陀ヶ滝 昭和前期、一九三〇～四〇年代 岐阜県博物館

郡上八幡（現郡上市）とその周辺の名勝を紹介する、八枚組の絵葉書一枚。実際の阿弥陀ヶ滝を撮った写真。葛飾北斎「諸国瀧廻り 木曾路ノ奥阿弥陀ヶ瀧」（出品番号170）とは大いに異なる。

○籠の渡し

174 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 武佐^{むさ} 宮本無三四 大判錦絵 嘉永五年（一八五二）六月 住吉屋政五郎 岐阜県博物館

江戸時代の剣豪、宮本武蔵は武者絵の主題として好まれ、巨大な獣や妖怪などを退治する架空の物語が描かれた。本図では武蔵が籠の渡しに乗り、野衾^{のふすま}（ムササビ）と空中戦を繰り広げている。武蔵と宿場名「武佐」を掛ける。

175 河島柳一 飛騨街道図巻 紙本著色 江戸時代末、十九世紀半ば 岐阜県博物館

金沢藩士、河島柳一が、信州上田から飛騨を通って富山までの飛騨街道筋を描いた絵巻。天保十三年（一八四二）六月四日に江戸を出発した旅に基づいて制作。画中天保十四年（一八四三）五月に切り開いた道が描かれているため、制作時期の上限が設定できる。

飛騨の籠の渡しも描いている。江戸の浮世絵師が描いた錦絵と異なり、本絵巻中の籠の渡しは、現地で見えた実際の経験に基づいて描いたものである。

○吊り橋

184 伴蒿蹊 著、田中訥言 画、伴資親 校 関田耕筆 巻之一 大本 文化三年（一八〇六）八月 須磨勘兵衛 岐阜県博物館

本書には飛騨の藤橋^{ふじばし}が絵入りで紹介される。こういった藤橋が葛飾北斎「諸国名橋奇覧 飛越の堺つりはし」（出品番号183）で取り上げられたと推測することができる。本書の藤橋には手すりがあるが、北斎の図ではそれがなく、下に落下防止の網が渡されている。柴を背負って画面右奥を向いて橋を渡る人物は共通する。

第六部 舞台は岐阜 芝居・伝説・出来事

○壬申の乱

186 美濃国不破名所案内図 大倍判墨摺絵 江戸時代、十七世紀～十九世紀半ば 美濃不破関月堂 岐阜県博物館

不破の関（現関ヶ原町）があった旧跡の名所案内図。不破の関は天武天皇が壬申の乱の後に設置。朝廷を守る関であったが、桓武天皇のときに廃止された。その後、和歌の歌枕として取り上げられるようになる。名所として親しまれた。本図では関跡の俯瞰図に、大伴家持や藤原定家らの和歌が添えられている。

○牛若丸と熊坂長範

188 歌川貞房 熊坂長範 間判錦絵 文政（一八一八～三〇）～嘉永（一八四八～五四）頃 山本屋平吉 岐阜県博物館

熊坂長範とは、大垣市青野町に残ると言う「長範物見の松」の上から子分に旅人の往来を見張らせたと伝えられる盗賊の頭。謡曲「熊坂」では、旅の僧が長範の亡霊に出会い、松の下で供養をしたところ、長範が牛若丸に討たれたいきさつを語ったとする。本図で長範は雑刀を持ち、武装した姿で松の根元に控えている。これと同様の絵柄が、二代歌川広重の「名誉常盤松」（出品番号189）にも見られる。

191 歌川芳艶 牛若丸と熊坂長範 大判錦絵三枚続 安政六年（一八五九）

五月 葛屋吉蔵 岐阜県博物館

牛若丸の一行と熊坂長範の一味が戦う場面を描く。熊坂長範の手下たちが画面中央の衣に向かって槍や刀を一斉に突き立てる。しかし、それは牛若丸ではなかった。本人はひらりと跳んで身をかわしており、長範に扇を投げつけて命中させる。

193 土人形（土雛） 牛若丸 塑造彩色 昭和十二年（一九三七） 岐阜県博物館

牛若丸を立体造形化した作品。熊坂長範と戦う場面ではなく、京の五条大橋で弁慶と対決する有名な場面を表す。牛若丸は笛を吹き、その傍らには橋が見える。

○関ヶ原の戦い

202 関ヶ原合戦図絵巻 下巻 紙本着色 江戸時代後期、十八〜十九世紀

岐阜県博物館

時間を追って関ヶ原の戦いの様子を描いた絵巻。

上図は岐阜城落城の場面。東軍の攻撃によって、城主の織田秀信（信長の孫。幼名は三法師）は降伏。笠が出ているのは降伏の合図である。

下図は河渡の戦いの場面。東軍の黒田長政らが西軍を河渡川（長良川）で破った戦いである。図では長政らが川を馬に乗って渡っている。

○濃尾震災

213 John Milne, W.K.Burton 著、K.Ogawa 写真 The Earthquake of

Japan, 1891. 洋装本 明治時代後期、十九世紀末〜二十世紀初期

Lane, Crawford, & CO., Yokohama, Japan 岐阜県博物館

外国人によって刊行された濃尾震災の記録写真集。掲載図のような、長良川の鉄橋の崩壊などを撮影した写真が収められている。

本書のような写真製版や印刷技術に押されて、錦絵はその役目を終え、明治三十年（一八九七）代には滅亡に瀕する。

214 片山逸朗 編 濃尾震災 半紙本 明治二十六年（一八九三）三月 勝沼

武一 岐阜県博物館

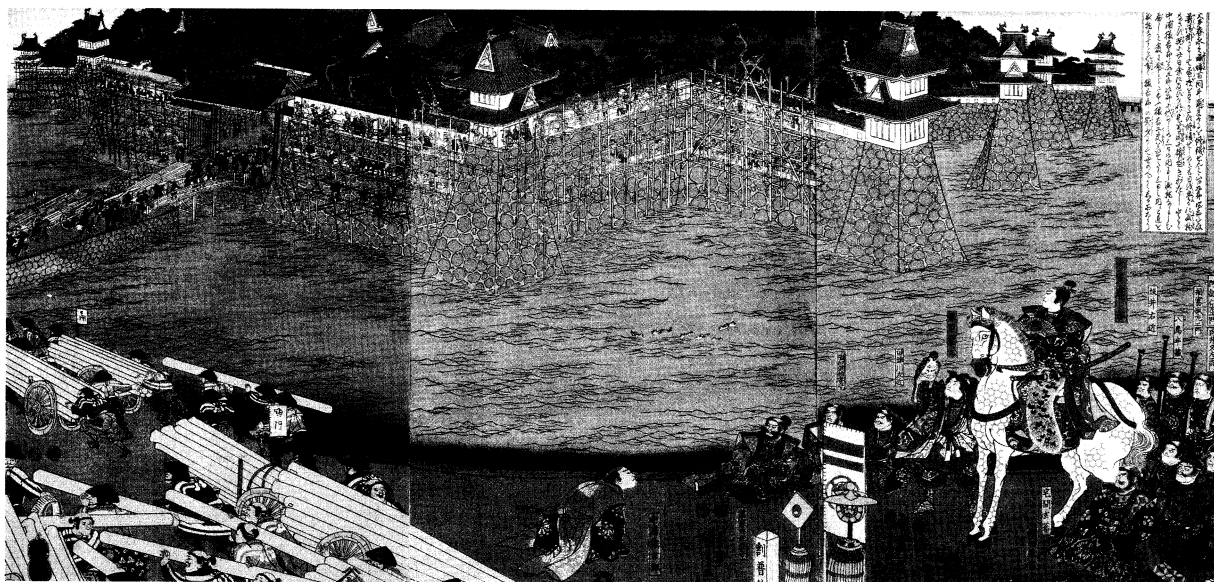
岐阜市の片山が編集した濃尾震災の記録。岐阜測候所の観測・研究成果を取り入れ、岐阜・大垣などの被害状況を掲載図のような図を入れて紹介。このような印刷物の普及もあり、錦絵の出版は終焉に向かう。

215 濃尾大震災横死者三十七回忌供養・西国三十三所本尊観世音連合開扉ボスター 昭和三年（一九二八） 岐阜県博物館

濃尾震災から三十七年目に行われた、震災横死者の仏事供養を知らせるボスター。同時に行われた西国三十三所観音霊場の本尊ご開帳も告知する。

この頃には既に錦絵は版行されなくなっている。

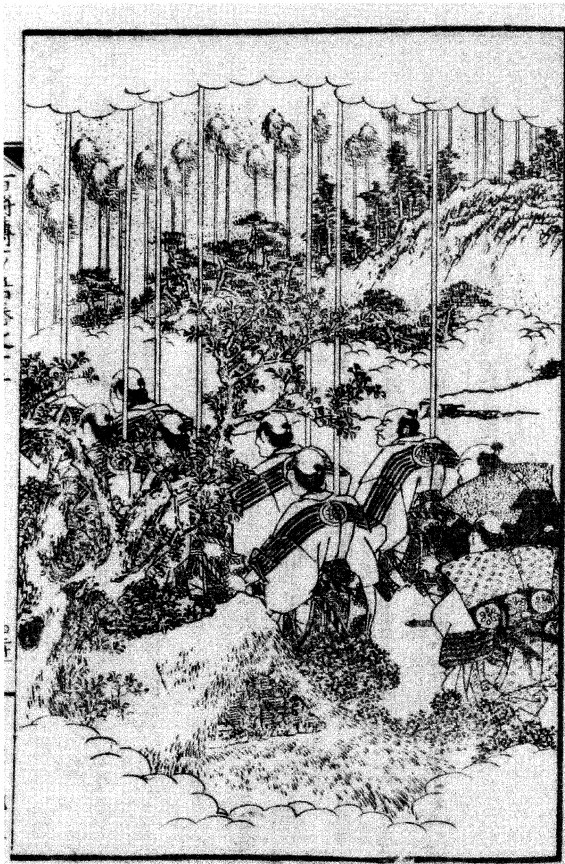
本稿の解説を作成するに当たって、浅野秀剛氏（千葉市美術館）、岩佐伸一氏（大阪歴史博物館）、総井淳子氏（岐阜県図書館）、佐々木守俊氏（町田市立国際版画美術館）、菅原真弓氏（京都造形芸術大学）からご教示を賜りました。また、各作品所蔵者から報告書執筆及び写真掲載のご快諾を賜りました。末筆ながら、ここに記して感謝の意を表します。



3 歌川国芳 大多春永の城堀修復 岐阜県博物館



11 豊原国周 大日本三名将鑑 岐阜県博物館





39 三代歌川豊国(国貞)
此下藤吉 個人蔵
木曾六十九駅 細久手 日吉の里



18 歌川国芳 太平記英勇伝 保里蘭丸永保 岐阜県博物館



27 柳斎重春 三代目中村歌右衛門の武智光秀と二代目嵐璃寛の真柴久吉
岐阜県博物館



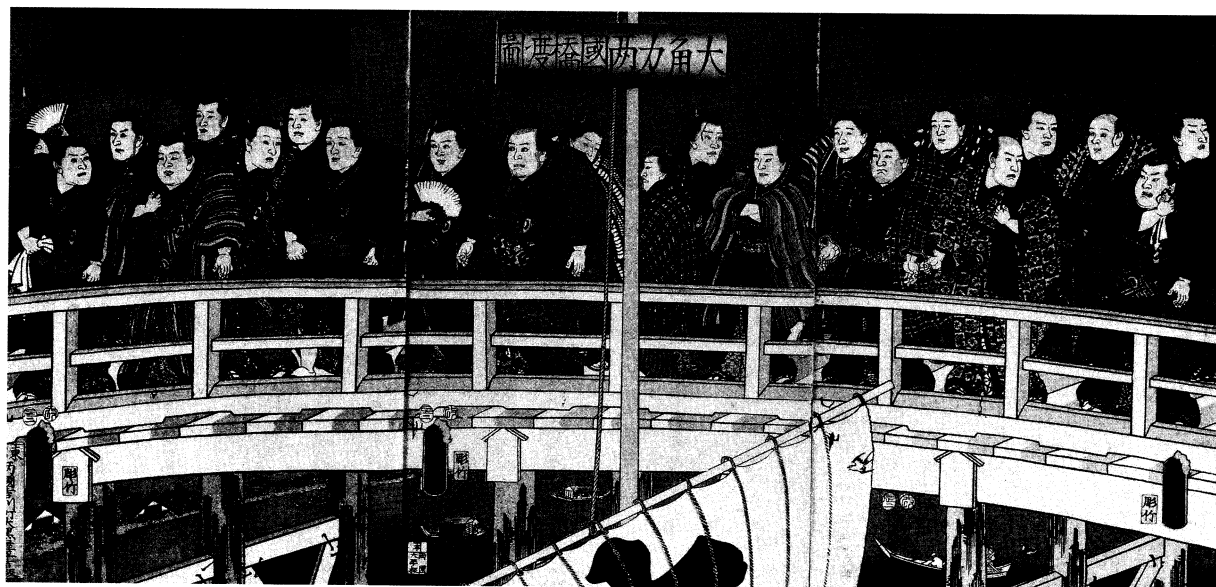
44 落合芳幾 太平記英勇伝 竹中半兵衛重治 岐阜県博物館



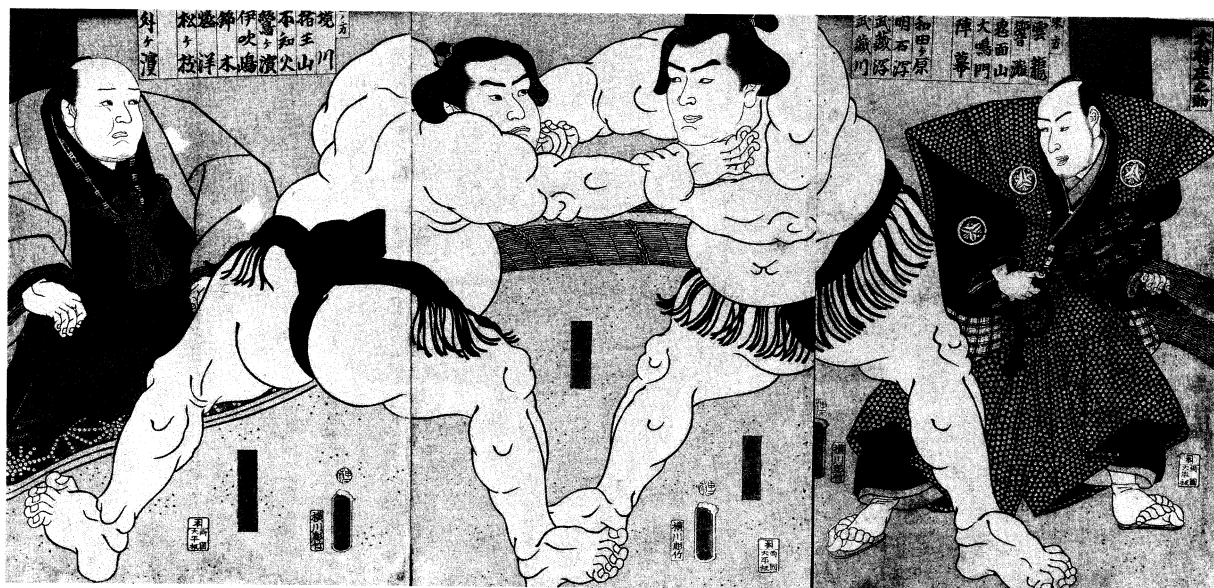
43 土人形（土雛） 焼香太閤 岐阜県博物館



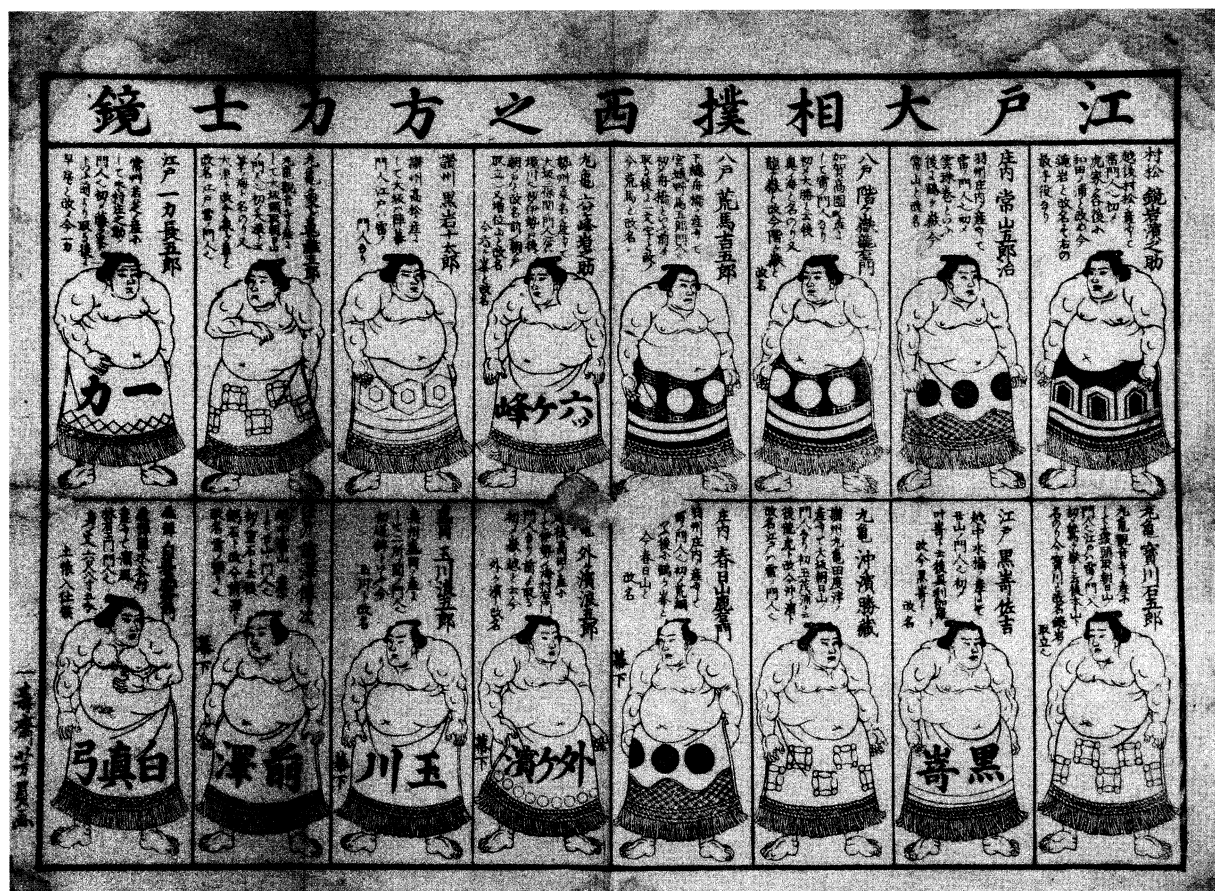
47 歌川芳虎 太平記英雄鑑 岐阜県博物館



49 三代歌川豊国（国貞）
岐阜県博物館
大角力両国橋渡図



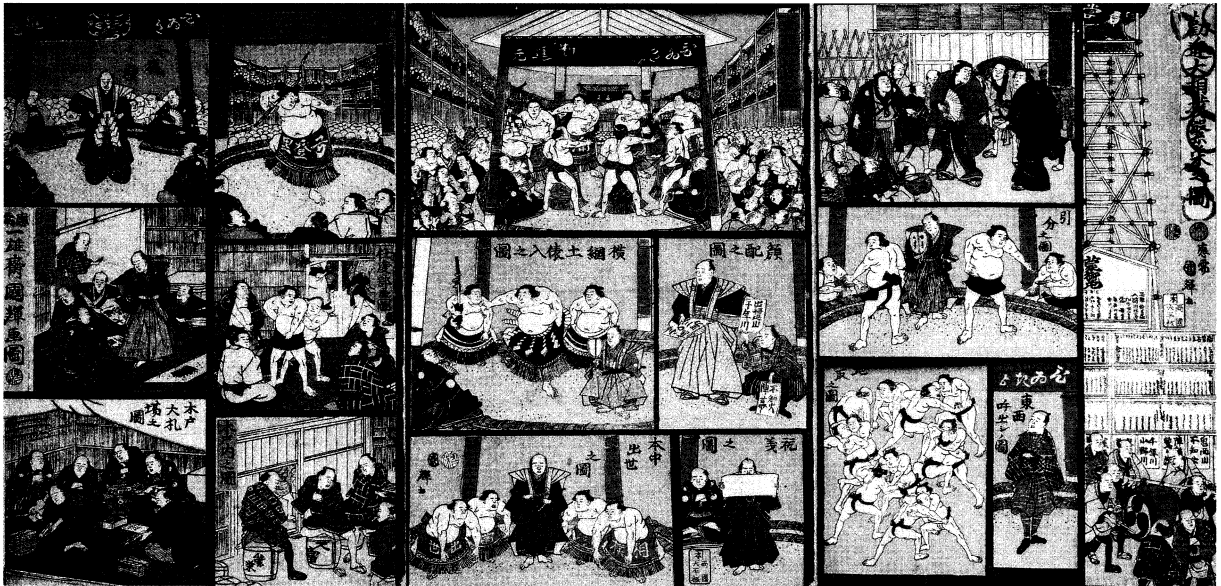
50 二代歌川国貞
岐阜県博物館
荒馬と虹ヶ嶽の取組



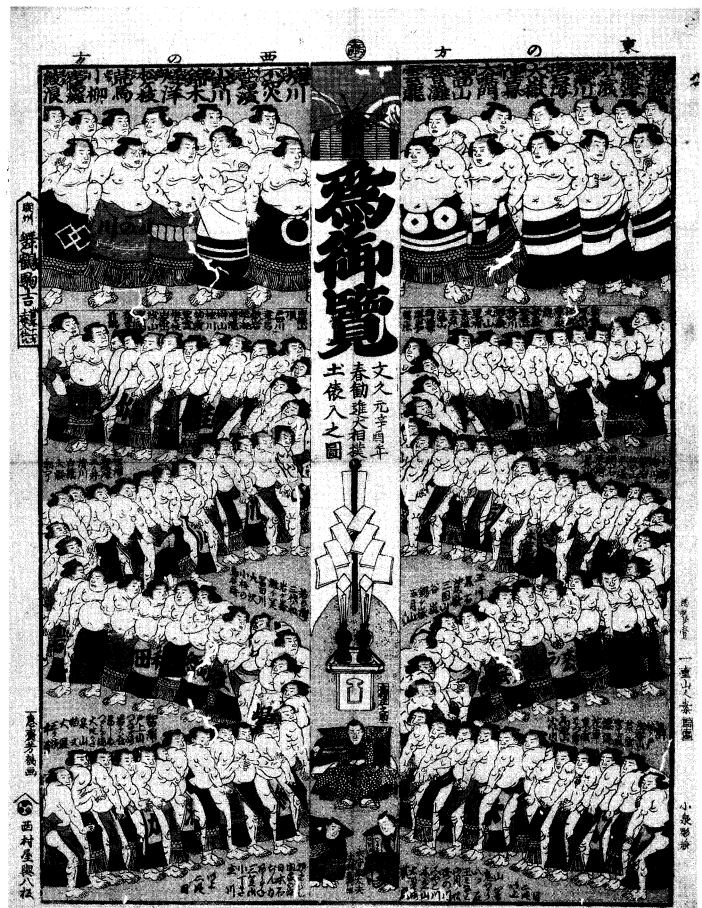
56 歌川芳員 江戸大相撲西之方力士鏡 岐阜県博物館



58 落合芳幾 大日本大相撲勇力関取鏡 岐阜県博物館



59 二代歌川国輝
岐阜県博物館
勸進大相撲繁栄之図



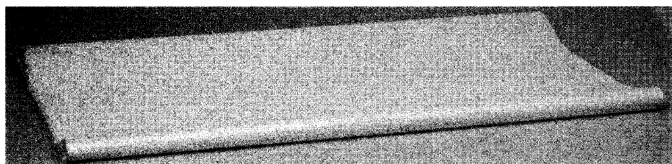
67 落合芳幾
文久元辛酉年春勸進大相撲土俵入之図
岐阜県博物館



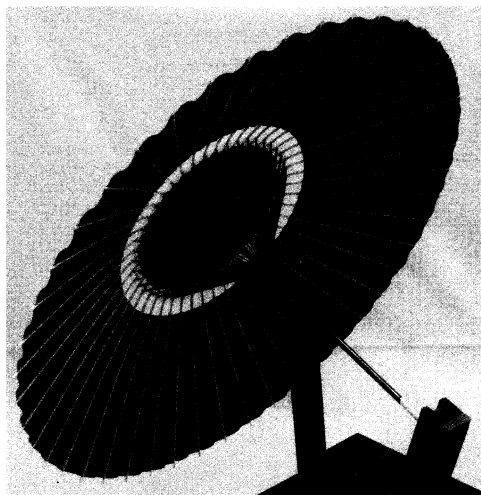
68 歌川国明 大角力稽古図 岐阜県博物館



70 六樹園飯盛 (石川雅望) 作、葛飾北斎画 飛弾匠物語 卷之一 岐阜県図書館



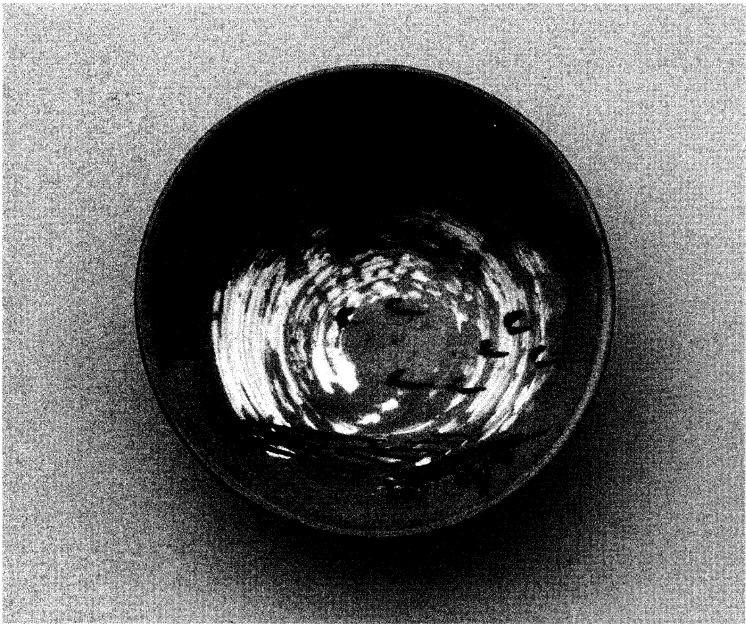
75 美濃紙
岐阜県博物館



72 和傘 岐阜県博物館



82 濃州長良川鵜飼図 岐阜県博物館



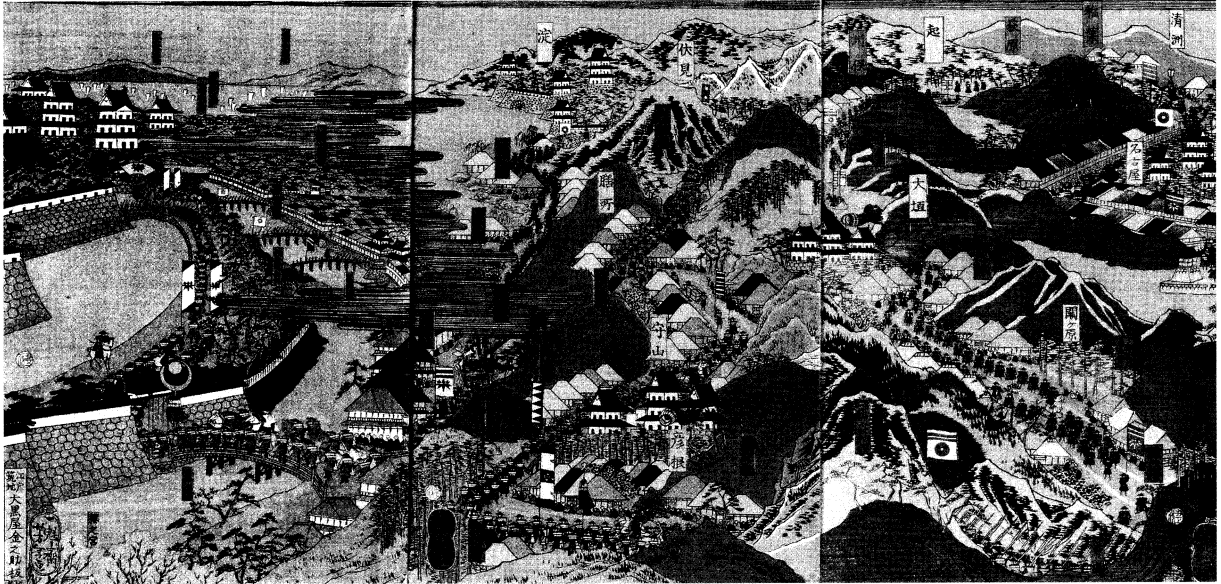
86 福田旭水 金華山焼 鵜飼図盃 岐阜県博物館



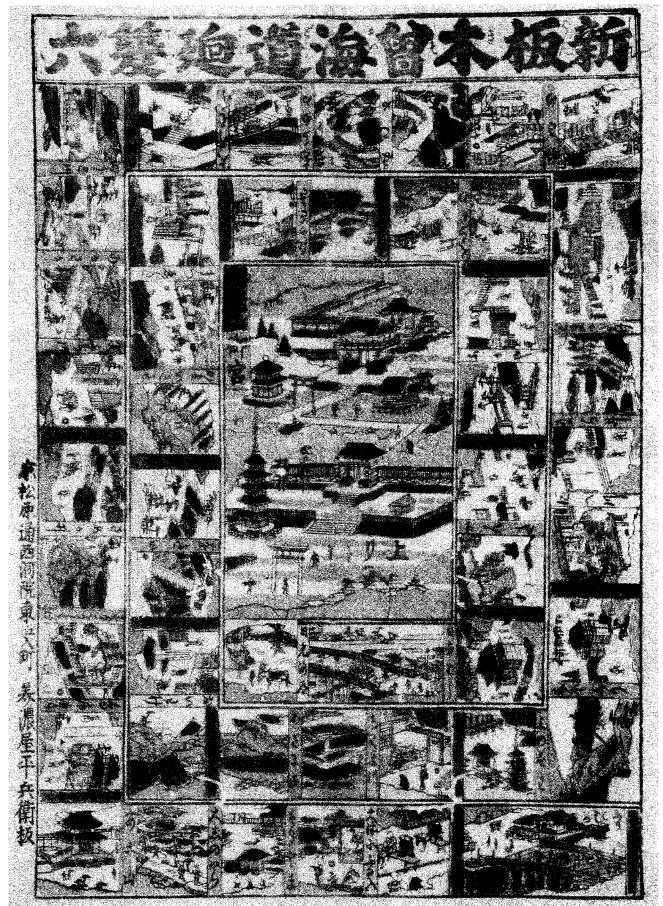
84 張月戴 鵜図 個人蔵



85 三浦千春著、池田崇広画 美濃奇観 上巻 岐阜県博物館



93 月岡芳年 東海道名所図会 (部分)
岐阜県博物館



95 新板木曾海道廻双六
岐阜県博物館



112 歌川広重 木曾海道六拾九次之内 加納 岐阜県博物館



132 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 大井 斧定九郎 岐阜県博物館



129 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 落合 久米仙人 晒女 岐阜県博物館



140

土人形（土雛）

常盤御前

岐阜県博物館



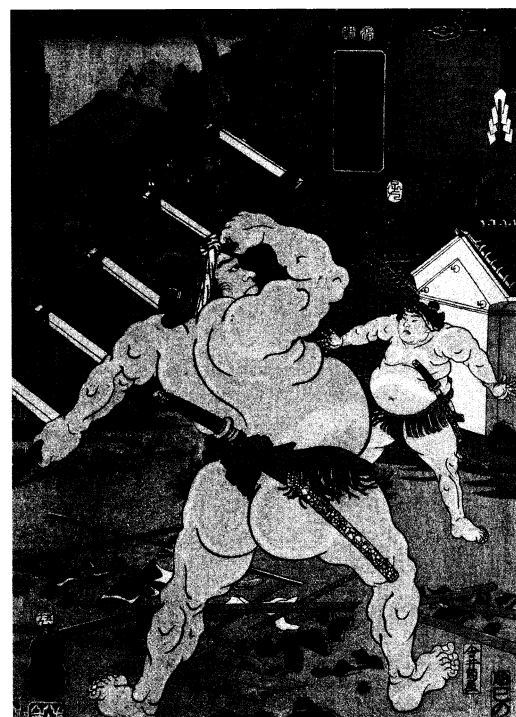
133

歌川国芳
岐阜県博物館

木曾街道六十九次之内

大久手

一ツ家老婆



154

歌川国芳
蝶五郎

木曾街道六十九次之内
岐阜県博物館

関ヶ原

放駒蝶吉

濡髪



153

歌川国芳
岐阜県博物館

木曾街道六十九次之内

垂井

猿之助



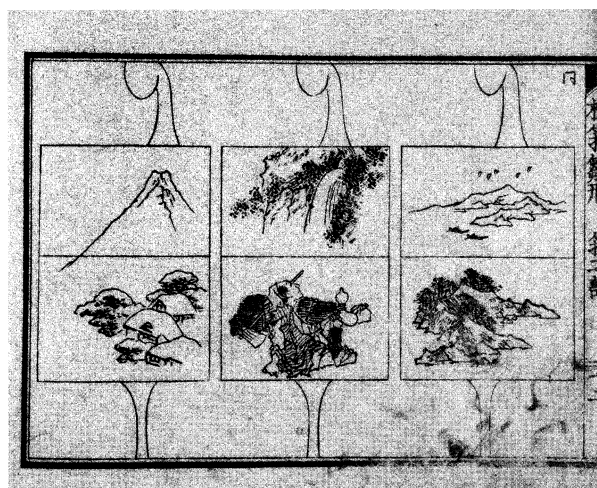
156 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 今須 曾我兄弟
岐阜県博物館



155 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 今須 曾我兄弟
岐阜県博物館



163 三代歌川広重 小学教育大日本名所図会 養老瀧 岐阜県博物館



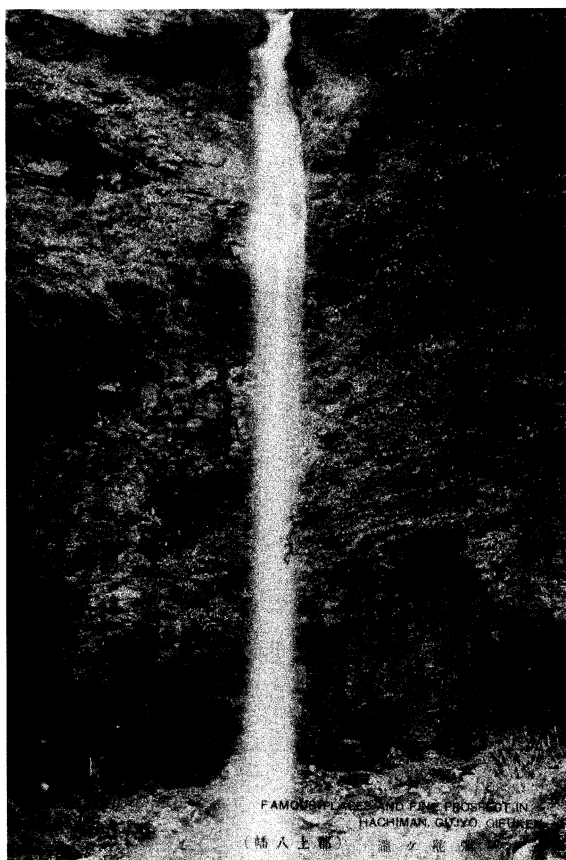
167 葛飾北斎 今様櫛箆雛形
岐阜県博物館



165 松浦守美 本朝廿四孝 美濃国養老
岐阜県博物館



166 引札 酒店 岐阜県博物館



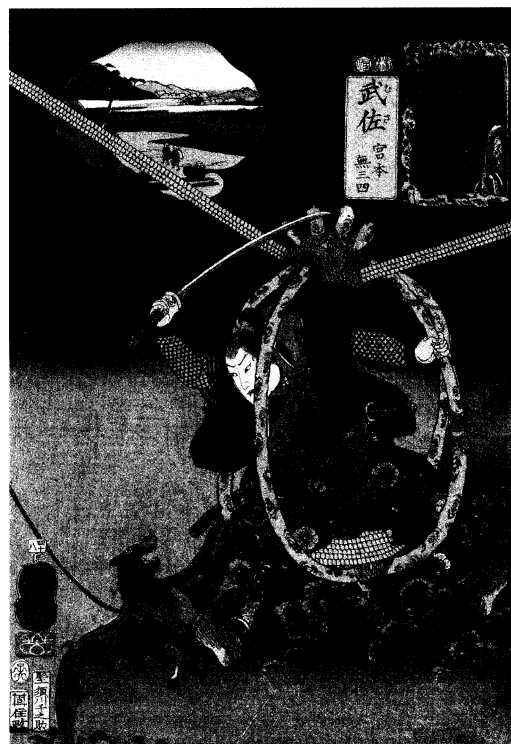
171 郡上八幡工八ガキ 阿弥陀ヶ瀧 岐阜県博物館



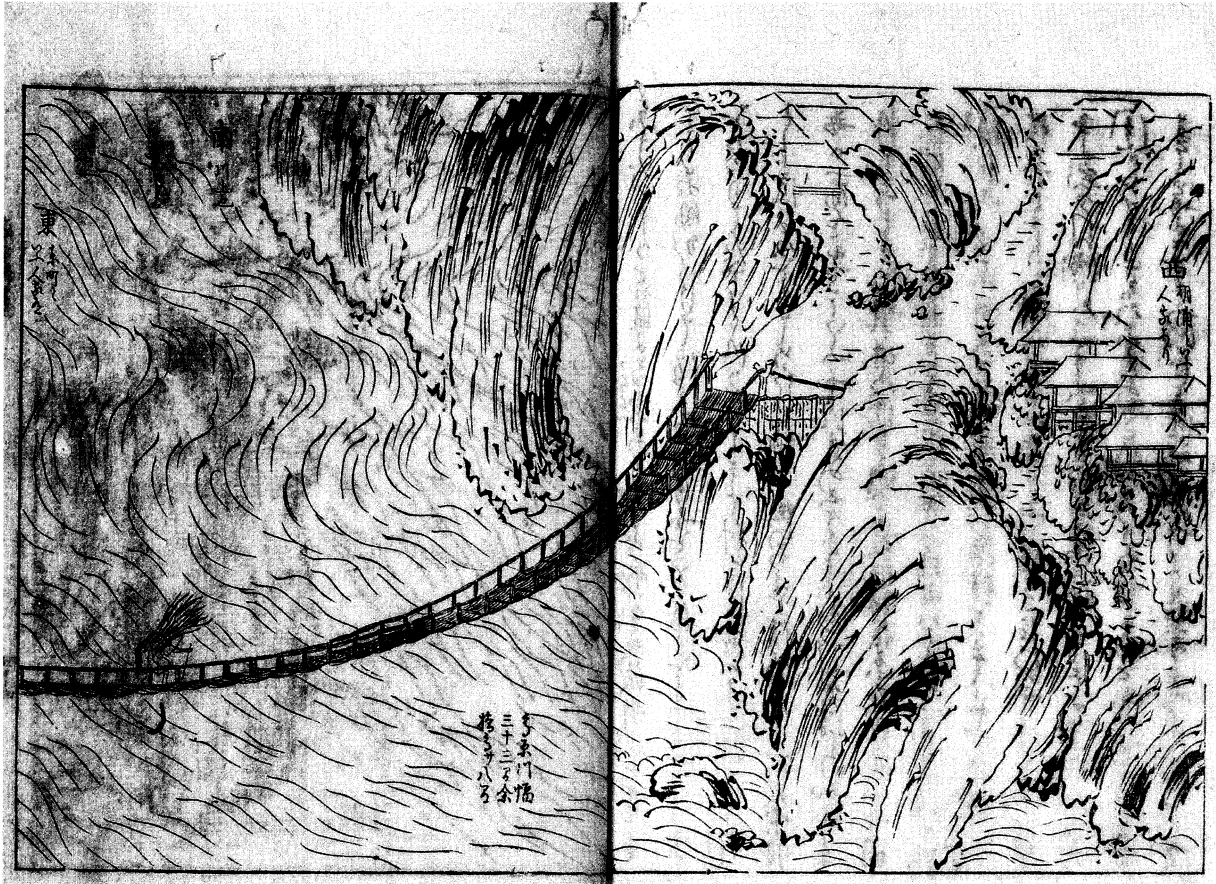
168 養老名勝絵葉書 養老の瀧 岐阜県博物館



175 河島柳一 飛弾街道図巻 岐阜県博物館



174 歌川国芳 木曾街道六十九次之内 武佐 宮本無三四 岐阜県博物館





193

土人形 (土雛)

牛若丸

岐阜県博物館



188

歌川貞房

熊坂長範

岐阜県博物館

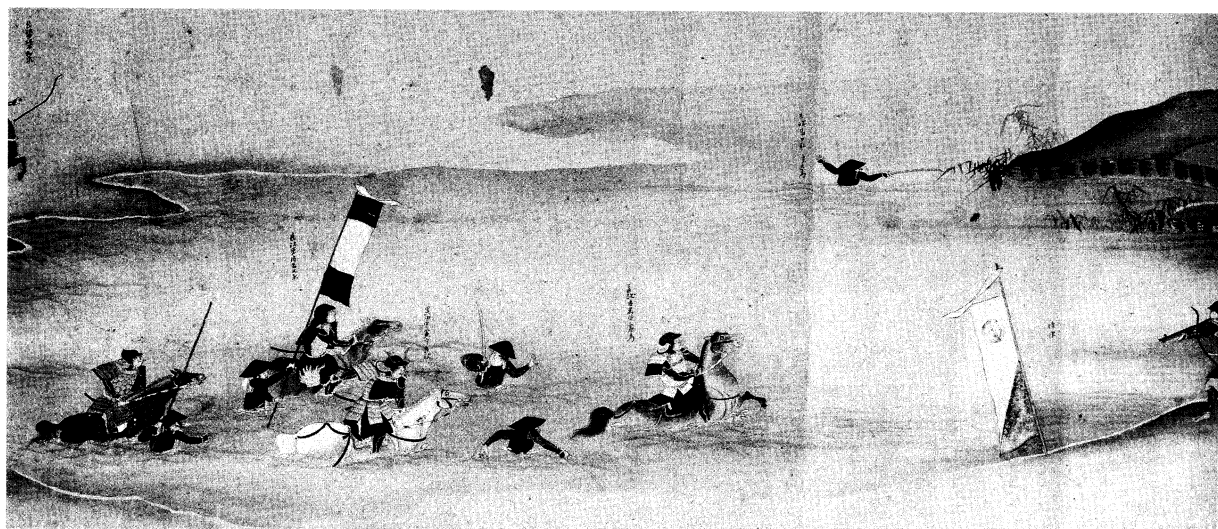


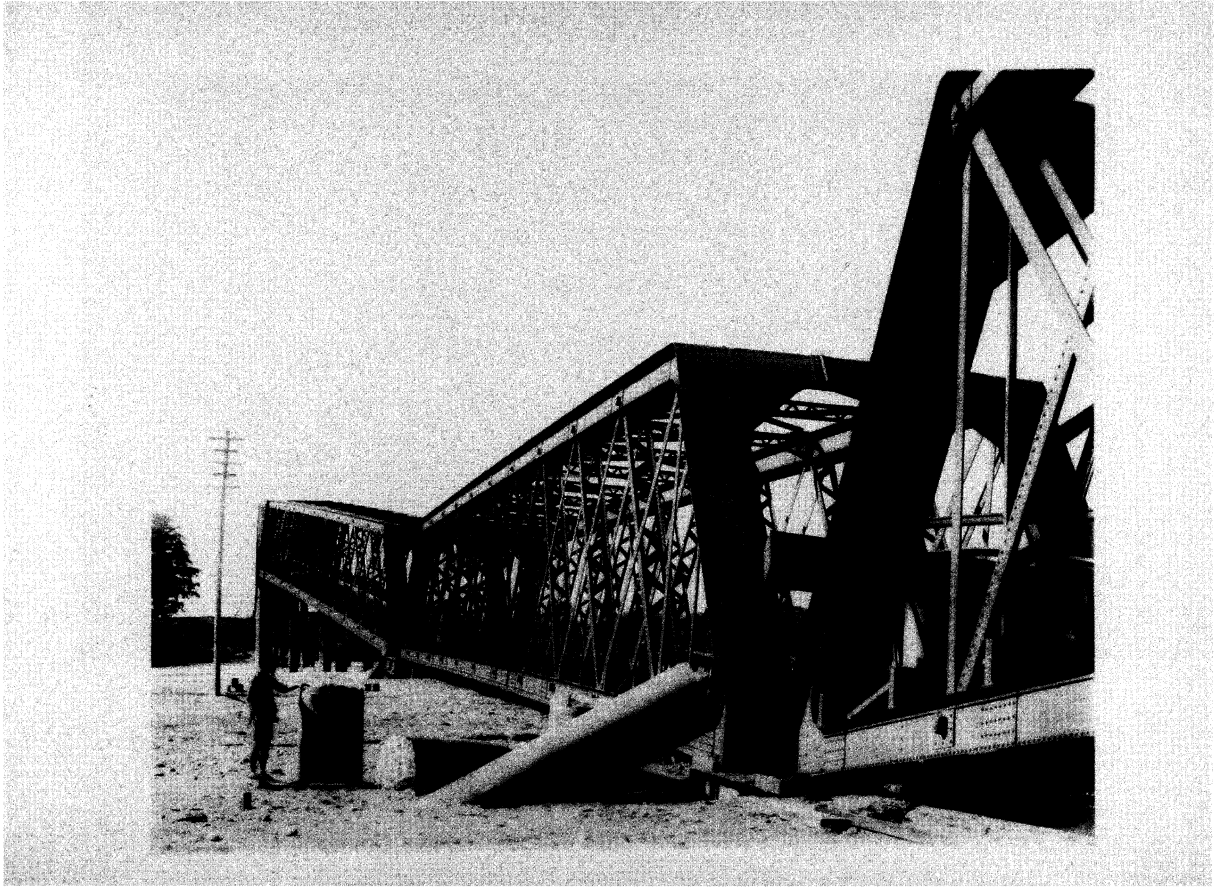
191

歌川芳艶

牛若丸と熊坂張範

岐阜県博物館



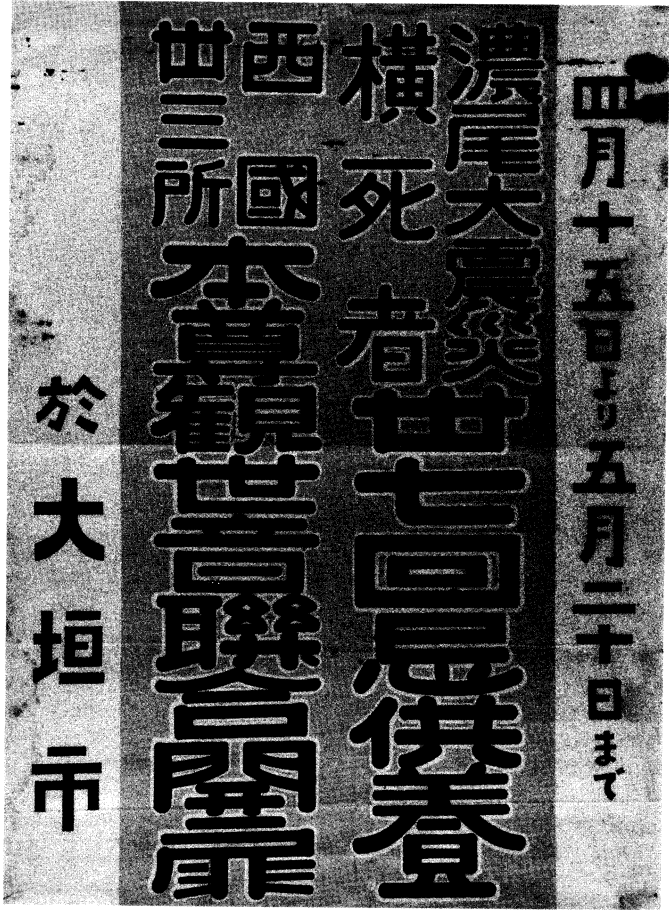


213 John Milne, W.K.Burton 著 K.Ogawa 写真 The Earthquake of Japan, 1891. 岐阜県博物館



圖之失宅社神波奈伊市阜岐

214 片山逸朗 編 濃尾震誌 岐阜県博物館



215
濃尾大震災横死者三十七回忌供養・西国三十三所本尊観世音連合開扉ボスター
岐阜県博物館